

イタリア・ユダヤ史研究 —ルネサンス期を中心として—

李 美奈

1. 初めに

西欧のユダヤ史研究は 19 世紀から行われている。その研究対象は、12 世紀ドイツの十字軍、15 世紀スペインのレコンキスタ、近代のフランスをはじめとするユダヤ人の解放及び全体主義など、西欧の歴史の流れと密接に関係した時代や地域である。これらの研究が盛んな一方、イタリアのユダヤ人の歴史は比較的最近まで注目されていない。イタリアは、中世においては十字軍やレコンキスタのように悲惨な迫害に遭遇していないし、近代においてもナチスの台頭を迎えるまでは深刻な反セム主義を経験しなかったため、ユダヤ人問題を扱う上で第一に注目すべき地域ではなかった。しかし、イタリアは西欧の中で古代から現代まで追放されることなくユダヤ人が住み続けている唯一の地域であり、また中世の後期にはイギリス・フランス・スペインからの相次ぐ追放、及びドイツの激しい迫害からの避難者が多く移住した場所であるため、ユダヤ史の中で重要な地域であると共に、これらの移住はルネサンスの最盛期と重なるため、西欧の歴史との関係においても非常に重要である。

本稿は、ルネサンス期イタリアのユダヤ史に関する研究動向を発端から現在まで大まかに追い、さらにイタリアで 16 世紀に始まるゲットーの建設がどう扱われてきたかを詳説する。筆者がゲットーの建設に注目するのは、近代国家形成以降の西欧における国民概念とユダヤ人政策の葛藤や、近代以降のユダヤ人のアイデンティティ意識を捉える上で重要だと考えるからである。（これについては第 4 節で述べる。）ルネサンス期イタリアのユダヤ史を中心にした研究についてはイスラエルに端を発しているところが大きいですが、国際的な動向をひとまずおさえることを目的にし、主に英語で出されている論文を中心に扱う。

2. イタリア・ルネサンスのユダヤ史研究

2-1 ユダヤ年代誌の一部としてのイタリア・ルネサンス

ユダヤ人についての歴史研究において、中世後期のイタリアは同時代のドイツやスペインなどと比べてあまり注目されていなかった。19 世紀及び 20 世紀初期の研究では、ルネサンス期は長いユダヤ年代誌の一部として扱われるのみである。ルネサンスを研究対象に入れる背景としては、ユダヤ史の文脈から必要と考えられたからではなく、西欧の歴史において重要な時代であるという理由が大きい。そのため、ルネサンス研究において最も重要な位置を占めるブルクハルトの影響が強く、ルネサンス個人主義の影響をユダヤ文化の中に見出していく傾向が、初期の研究に顕著に見られる。古くユダヤ学⁽¹⁾成立当初の研究としてはハインリヒ・グレーツの『ユダヤ人の歴史』(Heinrich Graetz, *History of the Jews*, 1894) がある。第 4 巻で扱われるイタリア・ルネサ

ンス時代に関する叙述部分において、グレーツはキリスト教社会がルネサンスの啓蒙的思想を發展させ、ユダヤ人に対して寛容な環境を整えていたと考える。ユダヤ人は資本家や外交家として重宝され、ルネサンス思想の影響を受けて啓蒙的な思想を發展させた。しかしドイツから伝統を守るユダヤ人が、スペイン・ポルトガルからマラーノが流入し、ユダヤ人共同体が分裂しがちだったこと、15世紀末から地中海地域に宗教裁判を中心とする非寛容な風潮があったこと、また、ルネサンス思想は中世教会の道徳的荒廃に対する精神的反省によって發展したが、ユダヤ社会においてはこうした変化が内部から必要とされていなかったことから、ルネサンスの影響は限定的に終わった。このように、グレーツはルネサンス思想が近代の市民の發展、啓蒙的思想の源流であるというブルクハルトの見解を元に、ルネサンス時代がユダヤ社会においても伝統を守る中世から抜け出して近代へと入りかけていた時代と見ている。

またユダヤ年代誌の一部としての研究の後期のものとして、サロ・バロンの『ユダヤ人の社会と宗教の歴史』(Salo W. Baron, *A Social and Religious History of the Jews*, 1969)がある。バロンもグレーツの時代観を引き継いでいるが、イタリア・ルネサンスの時代を前半のルネサンス最盛期と後半の対抗宗教改革期とにより明確に分けている。前半においてはキリスト教社会における個人主義・平等主義、交易を基盤とした著しい経済成長、及び宗教から離れた純粋な学問関心という背景から、ユダヤ人が平等な個人として受け入れられ、また経済上の重要な役割を担い、学問においても翻訳やヘブライ学への貢献を果たし、キリスト教社会へと参加していく時代とする。後半においては、対抗宗教改革・倫理性が強調され、それに伴い高利貸しが非難の対象となったこと、またオスマントルコ台頭によりイタリア諸都市の経済成長に陰りが見え始めたことから、ユダヤ人の経済的重要性が落ち始めただけでなく、イタリアにもトルコにも交易拠点を置くユダヤ人への信頼が失われていった時代と捉える。グレーツと同様、この研究も一般的な歴史観が先立っており、西欧の歴史の中にユダヤ人を登場させるといった描き方をしている。バロンの書くユダヤ史において、イタリア・ルネサンスはここからドイツに啓蒙的な思想が伝播し宗教改革を導く前段階として重要なものであり、この時代のユダヤ史に焦点を当てることに関して固有の重要性を見出しはしないようである。

2-2 一つの研究対象としてのイタリア・ルネサンス：第1世代

ユダヤ史の中でイタリア・ルネサンス時代が独立して研究対象となるのは、1950年代以降である。まず中世のユダヤ史研究者の中から、イタリア・ルネサンス時代を対象とする研究が開始された。中世のフランスやドイツにおけるユダヤ研究と共に行われ、それらとの比較の中でルネサンス期イタリアに注目する意義が見出されていく。

東欧や古代などを含め幅広く歴史研究を行ったモーゼス・シュルバスは、『ルネサンス世界のユダヤ人』(Moses Shulvass, *Haye ha-Yehudim be-Italyah bi-tekuvat ha-Renesans*, 1955)で、ルネサンス最盛期のユダヤ文化を研究対象とし、この時代の文化を近代の解放へ繋がるユダヤ史の中に位置づけている。シュルバスは、啓蒙的環境の中でユダヤ人が、いかにユダヤ性を失わずにキリスト教社会の中で共生していくかという近代的問題に直面していたと考える。一方で、一般のルネサンス研究の影響も大きい。シュルバスが見出したルネサンス文化の影響とは、伝統的

共同体から離脱する個人主義であり、また芸術・学問などにおける人文主義という、初期のルネサンス研究の典型的な歴史観によっている。この研究は1300-1600年のみを対象とし、啓蒙的思想への反動ともいえる17世紀の反ユダヤ主義的風潮の時代を対象にしていないが、これはルネサンス文化が近代の萌芽と考える歴史観の影響と考えられる。

またイタリア・ルネサンスのユダヤ史研究の先駆者であるシーセル・ロスは、中世西欧のユダヤ史研究者であったが、後期にイタリア研究を中心に据え、1959年にルネサンス期イタリアを対象とした『ルネサンスのユダヤ人』(Cecil Roth, *The Jews in the Renaissance*, 1959)を出版した。この研究においても、西洋史学におけるルネサンス観の影響が見られる。ロスには先行研究の対象とする時代がルネサンス最盛期である15-16世紀に絞られていたことを反省し、15世紀の芸術を中心としたルネサンスよりも前に起こった14世紀の古典文学への回帰運動というラテン・ルネサンスに注目している。これは、当時ルネサンス断絶史観に対するアンチテーゼとして生まれた連続史観⁽²⁾の影響だろう。ロスはラテン・ルネサンスが起こった要因としてユダヤ人の存在が重要であることを指摘している。ユダヤ人はアラブ世界において古典文学や思想に関する著作を多く学んでおり、こうした著作を多数ヘブライ語に訳していた。翻訳活動は主にカトリック世界とアラブ世界の境界にあたるスペイン、プロヴァンス、南イタリアで行われ、古典文学への関心の高まっていたキリスト教世界に入ってラテン語に訳された。十字軍やレコンキスタ時代におけるカトリック世界とアラブ世界との対立の中で、ユダヤ人がアラブ世界からキリスト教世界へ思想を伝える役割を担ったのである。ロスが特にイタリアに注目するのは、ラテン文化、ビザンチン文化、イスラム文化そしてユダヤ文化が出会う土地だったからであり、こうした環境があったからこそイタリアにおいてルネサンスの知的活動は見事に醸成したと考えている。南イタリアで多くのユダヤ人がアラブ人学者と共に王室に雇われ、アラビア語文献やヘブライ語文献の翻訳作業に携わった背景を元に、ロスは、ルネサンス文献の中にユダヤ的な思想の影響を見出している。またユダヤ文化においても西欧ルネサンスの思想が多く反映されていると考え、絵画・手工芸・音楽などを対象に西欧ルネサンスの影響を見出した。このようにルネサンス思想に大いに影響を受けている時代を評価するロスは、17世紀迫害の時代については、ルネサンス文化への参加が徐々に狭まっていきユダヤ文化が閉鎖的になって発展が停滞する時代と捉えており、この時代の意義を見出していない。

これらのルネサンス時代に注目する初期の研究は、個人主義的な風潮の下ユダヤ人がヨーロッパ世界に参加していき、ルネサンス文化とユダヤ文化が相互影響する現象を重視しているため、両世界の分離を象徴するゲッソー建設後の時代にはあまり関心を持たない。例えばシュルバスは、ゲッソーの建設についてわずかしき記述していない。ゲッソーの建設は17世紀以降のキリスト教社会の反ユダヤ主義の影響によるもので、これにより個人主義の時代に共同体の運営が難しかったユダヤ人社会がゲッソーの建設によって伝統的な共同体組織として形成されたとする見解は、一般的な宗教改革時代の歴史観をなぞったのみである。またロスは、ユダヤ文化へのルネサンスの影響とユダヤ人によるルネサンスの文化的活動への参加が断絶する要因としてゲッソーを位置づけ、この時代の豊かな文化を後世まで残すことかなわず、ユダヤ文化はヘブライ的な性格を強めていくという、否定的な評価を下す。

2-3 1990年頃以降の研究：第2世代

ルネサンス期イタリアのユダヤ史研究は第1世代によって基盤ができあがり、その後発展していくことになる。この発展の最初に位置するのはシュロモ・シモンゾーンである。ルネサンス期イタリアのユダヤ史研究の可能性を確信していたロスからその指南を受けたシモンゾーンは、テルアビブ大学で1960年から *Italia Judaica Project* を開始し、1964年に *Diaspora Research Institute* を設立して、イタリアのユダヤ史研究が興隆する環境を整えた。この研究センターは1979年から始まるイタリアとイスラエルによるイタリア・ユダヤ史に関する共同研究の指揮をとり⁽³⁾、イタリアの中世から近代に入るまでの時代の一次資料を整理し翻訳を出版するというプロジェクトを中心に研究を進めていく⁽⁴⁾。1981年から現在に至るまで11回の国際学会を開催し、この間に多くのイタリアのユダヤ史研究者を輩出した。

シモンゾーンの代表的研究である『マントヴァ公国におけるユダヤ史』(Shlomo Simonsohn, *Toldot ha-Yehudim be-dukasut Mantovah*, 1962) は、ロスらと同時期の研究だが、ロスら先行研究に見られるような、ルネサンス文化との影響関係を重視する態度からは距離を置き始めていることが窺える。この研究は、注目されていなかったマントヴァ公文書館所蔵のユダヤ人に関する豊富な資料群を元にしてまとめたもので、序文においてシモンゾーンは、基本的に先行研究における一般的なイタリア・ユダヤ史に従う形で歴史を描くという態度を表明しているものの、実際にはこれらの資料群から、ルネサンスの影響と共に、ラビ法廷を中心とする自治組織の特徴や聖書解釈、ハラハー文学などキリスト教社会とは異なるユダヤ的要素をも多く見出しており、これまでの歴史観が変わる可能性を示している。またルネサンス思想の影響を過大視せず、この時代にはルネサンス思想からの影響及び同化という動きと、それに対する慎重な態度もしくは反対する動きが両方あり、またこの動きはルネサンス時代及び対抗宗教改革時代どちらにも見出されると考えた。すなわち、ルネサンス時代においても影響を受けることへの拒絶があったし、対抗宗教改革時代にゲットーが建設された後においても交流がなくなったわけではないと考えている。こうした歴史観はゲットーに対する見解にも見られる。外部社会からの隔離という現象を、ディアスポラにおいて民族的・宗教的特徴を発展させた中世的なものとして捉えている点ではロスと共通しているが、ゲットーの建設によって完全に隔離状態になったわけではなく、外部社会の影響は近代まで続いていると考えた。

ヨーロッパのルネサンス研究の影響を受けた先行研究の態度から脱していくシモンゾーンの姿勢は、この後の世代に受け継がれていく。こうした第2世代の研究の大きな背景として、まず資料が豊富に得られるようになったということがある。研究が盛んになるにつれ、イタリアに所蔵されている資料の存在が徐々に研究者たちによって確認されるようになり、81年から組織的な調査が行われると、主に16-7世紀を中心とした中世のユダヤ関連の資料が多く所蔵されていることが確認された⁽⁵⁾。

これらの資料に基づいて、ルネサンス期イタリア時代のユダヤ史研究が極めて多面的なものとなった。第1世代の研究において一般の西欧の歴史観に頼らねばならなかったのは、イタリアのユダヤ人に関する資料が少ないために、西欧の歴史にこれらの資料を重ね合わせて歴史を構成す

るしかなかったからである。これに対して発見された資料は独立した歴史を構成するのに十分な量であった。

またもう一つの背景として、イスラエルで主に研究を行う研究者が増えたことがある。第1世代の研究者たちは、西欧の文脈で研究を行っているために西欧の歴史の中のユダヤ研究になりやすかったということはもちろん、彼らの問題意識の中心は常に、ディアスポラ下でユダヤ人であることと西欧市民であることの緊張関係にあった。第1世代の研究者がキリスト教文化の影響を強調するのは、ルネサンス期イタリアのユダヤ人の歴史が、ユダヤ文化とキリスト教文化とを一致させる、つまりユダヤ人でありながらイタリア人でもあったという、近代以降多くのユダヤ人が取り組みながらも実現できなかった一つの理想に達したのではないかという期待があったからである。それに対しイスラエルで主に研究をする人たちは、こうした文脈からは切り離され、純粋にユダヤ史の中でこの時代を語るができるようになったと共に、彼らにとっては同化してこなかった歴史文脈のほうが重要になる。ユダヤ文化とキリスト教社会文化を中世・近代を通じて別のものとして見る傾向が強くなり、両者の関係性の変化をより冷静に観察することが可能になったといえよう。

こうした新しい流れの初めに、まず既往の研究成果を見直す作業が行われた。ロベルト・ボンフィルによる『ルネサンス期イタリアのユダヤ人の生活』(Roberto Bonfil, *Gli Ebrei in Italia nell'Epoca del Rinascimento*, 1991) は、新しく発見された資料が出版され研究が進むなかで、それらを踏まえた上で先行研究において使われてきた資料を中心に読み直し、歴史を書き直す作業を試みている。先行研究がルネサンスの個人主義を強調し、啓蒙的思想の吸収に重点を置いてきた事に対しボンフィルは、もしユダヤ人が平等な個人として受け入れられキリスト教社会の文化を積極的に取り入れていったのだったら、すでにユダヤ人はヨーロッパ人に同化し、近代以降まで続く問題は起こっていないはずだという矛盾を突く。新しい世代においてもイタリア・ルネサンスは近代の前提という位置づけであるが、ここでいわれる近代は、解放されたにも拘らず依然として反ユダヤ主義が残る問題を中心に据えている。ボンフィルはこの問題の背景にユダヤ人がキリスト教社会で「他者」であり続けたことがあり、さらにこの他者性は特にルネサンス時代に意識的に形成されたと考えている。まず、キリスト教社会にユダヤ人が平等な個人として受け入れられたという見解を否定し、キリスト教の正しさを証明するものとして、また市民の倫理を刺激する反面教師として精神的な側面で存在が必要とされていたに過ぎず、ユダヤ人は自然に反する存在とされ基本的には拒絶されていたと反論する。同様に、ユダヤ人の方もキリスト教社会に積極的に参加したわけではなく、多くのラビがルネサンス文化のユダヤ文化への影響を警戒し、このことによってユダヤ人性を自覚した。ユダヤ人はキリスト教徒との比較のなかで「自己」と「他者」との区別という基準から自らのアイデンティティを形成していった。ボンフィルは先行研究の反省を厳格に捉え、キリスト教社会との影響関係から研究をすることを回避し、敢えてこの差異を記述するのみに徹底すると表明している。

次に、ルネサンス期イタリアのユダヤ社会における様々な側面が注目されるようになった。特に81年からの調査によって宗教的な資料が中心に発見され、それまで部分的にしかわからなかった当時のユダヤ教教義について全体像が浮かび上がりつつあった。『シュロモ・シモンゾーン

退官記念特集—中世及びルネサンス時代のユダヤ史研究』(Shlomo Simonsohn and Daniel Carpi ed., *Shlomo Simonsohn Jubilee Volume: Studies on the History of the Jews in the Middle Ages and Renaissance Period*, 1993)にはそうした成果が色濃く反映され、ルネサンス期イタリアのユダヤ教の思想に注目しており、とりわけいかにユダヤ教を守っていったかという問題を扱った論文が多く収められている。例えば、キリスト教への改宗の問題や共同体の形成、及びユダヤ教徒としての教育の問題についてなどである。他方で、ユダヤ人社会の生活や文化的側面のケーススタディが豊富となる。『イタリアのルネサンス期及びバロック期におけるユダヤ文化に関する論文集』(David B. Ruderman ed., *Essential Papers on Jewish Culture in Renaissance and Baroque Italy*, 1992)はルネサンス期イタリアのユダヤ文化に関する主要な研究論文を集めたものだが、各研究者が注目する文化やその側面は多岐にわたる。ルネサンス文化とユダヤ文化の関係についての研究においては、修辞学・芸術・演劇といった西欧のルネサンス研究において主に用いられる文化的側面に注目していたが、引き続きルネサンスの影響を研究しているものもあれば、ユダヤ教特有の説教や詩、カバラ思想などに注目して、ルネサンスの影響とは一度切り離して当時のユダヤ文化の特徴を純粋に引き出そうとする試みもある。

3. イタリア・ゲットー研究

イタリア・ルネサンス時代に建設の始まったゲットーが、一つの研究対象となったのはここ20年弱に過ぎない。Ghettoをタイトルに冠する本はイタリア語文献において多く出されているが、Ghettoがユダヤ人の存在の象徴として使われるのみで、その内実はイタリアにおける一般的なユダヤ人の歴史研究に過ぎない。

初期の研究においては特に歴史的な現象とも捉えられず、一つの事実に過ぎなかった。例えばグレーツは、ルネサンス後期においてユダヤ人を迎えることの利点と彼らへの嫌悪の風潮とが渦巻く時代の中で、妥協案としてゲットーが成立したという事実を述べるのみである。

ルネサンス時代を対象にした研究が始まると、ゲットーの現象もユダヤ史の中に位置づけられるようになるが、第1世代の研究ではルネサンス文化とユダヤ文化の影響関係を中心に行っているため、対抗宗教改革の時代についてはわずかししか触れられない。こうした研究においては、ゲットーの時代はルネサンス社会からユダヤ社会を切り離し閉鎖的で中世的な文化を復活させる時代と位置づけられ、否定的に捉えられている。

3-1 ゲットーの捉え方

1980年代以降によりやく、ゲットー建設という現象が一つの大きな歴史的分岐点と捉えられるようになった。学会の内容に注目すると、1984年のItalia Judaica Conferenceでは、1400年代以降を寛容な時代であるルネサンス期と迫害期であるバロック期に分けており、ゲットーは後者に位置づけられる。こうした歴史観はルネサンス期イタリアのユダヤ史研究が始まった頃から受け継がれてきたものであり、1400年代以降近代までをルネサンス最盛期と対抗宗教改革期に分ける、一般的なルネサンス研究の時代区分に沿ったものである。それに対し、1986年のItalia Judaicaでは隔離の時代としてゲットー建設以降を一時代としてテーマに挙げており、それ以降

の会議ではより明確に、1555年のゲットー建設を命じる勅令の年で時代を分けているのがわかる⁶⁾。また『イタリアのルネサンス期及びバロック期におけるユダヤ文化に関する論文集』は、ゲットー建設を基準に二つの時代に分けて構成されており、また前半期をイタリアへのユダヤ人の入植の時代であり、ルネサンス文化の影響を大に受ける時代とし、後半をゲットーへの隔離によって独自のユダヤ文化を形作る時代と位置づけている。この背景には、イタリアの歴史において対抗宗教改革期の始まりが不明確であったこと⁷⁾と、イタリア・ユダヤ史上では対抗宗教改革による影響よりも、ゲットーの建設による社会的変化のほうが重要視されたことがあるだろう。

ゲットーを歴史的岐点と捉えるにあたって、それまでのあいまいなゲットー観を改める必要性が出たことが、先の論文集の第2部冒頭を飾るベンジャミン・ラビドの論文「地理的な実在から歴史的な象徴へ—ゲットーという言葉の長旅」(Benjamin C. I. Ravid, “From Geographical Realia to Historiographical Symbol: The Odyssey of the Word Ghetto”)から窺える。ラビドは「ゲットー」という言葉が意味を広げられてきた歴史を辿り、その多義性ゆえの曖昧さを指摘している。ゲットーという表現が中東欧のユダヤ史においても多く使用されているが、厳密には強制的に隔離された狭い街区という性格を持つもので、ドイツにおいては数例のみにしか適用されず、また東欧やロシアに至っては適用されるべきではないとし、これからの研究でより慎重にこの定義を扱うことを求める。さらにゲットーが外界からの遮断を生み出したという認識や、ゲットーがユダヤ文化形成に負の影響をもたらしたという見解も改めるべきと考え、ユダヤ文化とそれを取り巻く環境との関係やその発展という文脈からゲットーの時代を捉えることを主張する。

この新しい世代では、ゲットーに積極的な歴史的意義を見出す傾向が強くなる。『ルネサンス期イタリアのユダヤ人の生活』でボンフィルは、近代以降も残るユダヤ人の他者性の成立の現象としてゲットーを捉えている。ゲットーは、基本的にはキリスト教社会においてユダヤ人を拒絶しながらも存在を必要とするという相反する要求を両立させる妥協案であるが、さらに踏み込んでゲットーの建設以降に迫害や追放がなくなっている事実にも注目する。16世紀以降、ユダヤ人が同化・改宗させるべき存在ではなく、改宗させずとも存在させるべき「他者」となり、この中世から近代への思考の変化に伴う歴史的な現象としてゲットーを位置づける。

また最近では、ゲットーが初期近代におけるユダヤ特有の文化形成に貢献したという認識がより広く共有されているようである。『文化変容とその不和：排除と包含の間の時代におけるイタリア・ユダヤ人の経験』(David N. Myers, Massimo Ciavolella, Peter H. Reill and Geoffrey Symcox ed., *Acculturation & Its Discontents: The Italian Jewish Experience between Exclusion and Inclusion*, 2008)はユダヤ社会が隔離されたゲットー建設の時代から、ゲットーから解放された後の近代ファシズム期までを対象とし、その間のユダヤ文化の変容と、文化変容をめぐるユダヤ社会とヨーロッパ社会の関係性について注目している。近代という大きな時代区分をまたいでいるが、これはゲットーの時代の文化変容とそれに対する抵抗という問題を、近代のユダヤ人解放後に起こる現象と類似のものとして捉えているためである。先行研究ではルネサンス期イタリアの事象は地域・時代に固有の現象として、ユダヤ史の中でも特殊な例として取り上げられてきた傾向が強いが、近代に起こったユダヤ人問題と類似の現象として扱うことでユダヤ史上の一般的な問題系へと繋げる視座を与える。

3-2 ゲットーをテーマにした研究例

ゲットーを歴史上の重要な現象として捉えるに伴い、ゲットーそのものをテーマにした研究も始まった。こうした研究では、歴史研究の一部としてだけではなく社会学や人類学をはじめとする理論からヒントを得て、ゲットー成立の背景やそのユダヤ史への影響など様々な側面が分析されていく。ここでは、2000年代以降によりやく出始めた著作物のうち、主要なものを二つ取り上げたい。

一つ目は『文化変容の舞台—16世紀のローマゲットー』（Kenneth Stow, *Theater of Acculturation: The Roman Ghetto in the 16th century*, 2001）である。ローマの中世から近代初期までのユダヤ人を継続的に研究し、さらにゲットー研究の先駆者ともいえるケネス・ストウは、ローマのゲットーを対象にし、キリスト教徒とユダヤ人の隔離や、ユダヤ人を拒絶しながらも存在を必要とするという相反する感情の妥協を許すといった機能の他にも、ユダヤ社会の文化形成^⑧において果たした大きな機能に注目する。16世紀において、教皇領では宗教的側面だけではなく世俗的な側面でも教皇の支配力が及び、ユダヤ人の宗教だけではなく文化までも否定される中で、ユダヤ人はキリスト教文化を世俗と宗教の両方において導入せざるを得なくなっていく。ストウによれば、ゲットーはユダヤ社会がキリスト教の文化の導入を緩やかなものにし、導入した文化要素をユダヤ教の思想に結びつけて変容させる猶予を作った。実際の要素としてはキリスト教的なものでありながら、そのファンタジー的役割としてユダヤ的な意味づけをすることで、ユダヤ文化がキリスト教のサブカルチャーとなりむしろ守られていった。この結果、ゲットーの時代だけでなく近代の解放以降にもユダヤ文化が生き残っていくのである。この研究は、それまでゲットー時代の文化形成をユダヤ教の伝統への回帰と捉えていた見解を修正し新しく独自の文化を形成する時代と捉えることで、ルネサンス文化の影響が強かった時代から近代の解放後にも独自の文化を守っていくユダヤ文化の歴史の流れを見事に繋げている。

二つ目はステファニー・ジークムントの研究である。ジークムントはゲットーをユダヤ史と共に西欧の歴史にも位置づけているが、そのゲットー観は先行研究とは全く異なる。ジークムントの『メディチ国家とフィレンツェのゲットー』（Stefanie B. Siegmund, *The Medici State and the Ghetto of Florence*, 2006）の特徴は、ゲットーを宗教的文脈から一度切り離して捉えることで、キリスト教社会の世俗をも含めた様々な変化を逆照射したことである。先行研究においては、西欧の歴史にゲットーを位置づけるにあたってキリスト教教義の文脈で捉えていたが、ジークムントは、キリスト教世界にユダヤ人の存在を許していた宗教的「パラダイム」^⑨が16世紀に限界を迎え、ユダヤ人を的確に位置づける新しい枠組みが必要だったことと、フィレンツェにおいて官僚的特徴をもつ初期近代国家が形成されつつあったことを、ゲットーの背景として捉えた。この論文は前半部と後半部で大きく分かれており、前半部において国家形成との関係におけるゲットーの成立について分析している。それによれば、15世紀前半までイタリアにおいては、*stato*（国家）は地域・領域とは無関係の諸団体によって構成されるものであったが、15世紀中頃に疫病対策として公国や各行政区をまたぐ人々の往来を管理する方策を取り始めたことで、境界線への意識が高まり領域的な概念となっていった。一方ではメディチ家が官僚的な思考に基づき効率

的な統治体制を整えていく中で、独自の境界を設定しこれに基づき経済や行政、共同体を管理し、他方では教会が内部改革において教区ごとに市民がキリスト教徒としての義務を果たすことを徹底し始める。境界線の設定によって、境界を越えることあるいは曖昧な存在に対する強い意識が生まれ、領域と住民との関係性が国家と教会によって強化されるなかで、ユダヤ人がフィレンツェ人でもキリスト教徒でもない存在として国家的枠組みからあぶり出された。この時代にはイタリア中にユダヤ人が流入し、この曖昧な存在は無視できないほどの数となり、フィレンツェ市民とは別の集団であるユダヤ人というカテゴリーを与え、その特有の領域を与える必要が生じた結果、ゲットーが建設された。論文の後半部は、ゲットー建設以降のユダヤ文化形成過程を追っている。これは先行研究の見解を引き継いでいるが、ユダヤ社会内部にのみ注目するのではなく、あくまで国家との関わりの中で捉える。ゲットー建設後のユダヤ文化形成は、共同体内部から起こったのではなく国家の主導により進められた。これはユダヤ人共同体を西欧社会から分離するのではなく、マイノリティグループとして官僚的な国家組織に組み込むためである。この研究はフィレンツェのケーススタディであるが、ルネサンス期イタリアに近代国家の萌芽が成立したと言われており、イタリア全域の一つの側面を表している研究といえるだろう。

4. おわりに

以上でルネサンス期イタリアのユダヤ史研究と、そのなかでゲットーがどう捉えられてきたかを述べた。最後にゲットー研究の意義と今後の可能性について簡単に触れておきたい。

イタリアのユダヤ人ゲットーの研究は始まったばかりである。ここ 30 年で発見された資料群は、現在もマイクロフィルム化、カタログ作成が進行中であり、研究対象となっていないものも多くあるだろう。これらの資料を用いた最近の研究においては個別研究が増えているが、それによって研究初期のルネサンス時代＝近代的、ゲットーの時代＝中世的という歴史観から抜け出そうとする傾向が生まれ、第 1 世代までの歴史を概観する研究では見えてこなかった歴史観が、これらの研究によって形成されてきている。その一つが、ゲットーの建設をルネサンス思想影響下の華やかな時代の終わりとしてではなく、近代以降にも生き続けるユダヤ独自の文化を形成する時代の始まりとして捉える見解である。

西欧の歴史観の影響から抜け出そうとした結果、これらの研究はキリスト教世界の歴史から独立して、ユダヤ史の中でこの時代を位置づける傾向が強くなった。しかし一方で、ジークムントのようにキリスト教社会の歴史との関係においてこの時代を捉える作業も重要だろう。キリスト教社会とユダヤ社会の接触する場面に注目することによって、キリスト教社会のみあるいはユダヤ社会のみを見ていたのでは認識しにくい問題を取り出すことができるのではないだろうか。

近代に向かって突き進み近代的枠組みに様々な要素を取り込んでいく中で、キリスト教社会が抱えた問題の一つの発現として、ゲットーを捉えることができるのではないかと、筆者は考えている。この問題は、近代解放以降においては、ユダヤ教徒でありかつヨーロッパ市民であるという宗教的アイデンティティとナショナリティの緊張関係という形で現れるものであるが、この問題はそれ以前において国家概念や国民概念の形成過程とゲットーの建設の関わりの中で起きたのではないかと。というのも、ゲットーは統一的国家形成が遅れ国家単位での追放令が発布されてい

ないドイツ及びイタリア特有の現象であり、またルネサンス期のイタリアに始まったとされている国家概念の形成と同時代に起こっているからである。また国家概念を捉える上で、ユダヤ人の生活のすべてを特定の街区に押し込め壁で囲むというゲットーの特徴を考えるのも重要である。というのもこの特徴は、それまでの対ユダヤ人政策に見られる個人に対する服装規制や職業規制とは明らかに異なっており、集団や領域という観念が含まれているからである。

最近のゲットー研究においては、キリスト教徒とユダヤ教徒の分離という側面に注目し、これによってユダヤ文化が独自に形成される環境を作ったというのが共通見解である。しかし隔離政策はこれに限らず、服装規定をはじめとして古代から様々な手法が用いられてきたという歴史がある。地理的な特徴が現れるのはこの時代が初めてであり、国家概念形成における集団や領域的観念との関わりで捉えることができるのではないか。

地理的・空間的特徴の研究についてこれまで注目されてこなかったのは、宗教学において一つの学問領域として確立しているとはいえなかったことが背景にあるだろう。しかし人文学において 1990 年代から空間論的転回 (Spatial Turn) と呼ばれる転機を迎え、宗教学においても理論整理の動きが盛んになってきている。宗教に関して空間的な分析を行うことの一つの特徴は、思想的な空間と認識される空間の両方に関わっていることである。認識される空間については地理学領域の研究が確立されているが、最近では思想的空間を追求する宗教学領域との超領域的な研究も見られる⁽¹⁰⁾。ゲットーについてはまさに、近代の形成における領域的観念の発達という側面と、それが実際に適用され具現化された側面とがあり、こうした理論の発展と密接に関わっていくものとなろう。

註

- (1) ユダヤ社会では中世まで、学問といえばタルムード研究、すなわちユダヤの教えを学ぶことを意味したが、近代以降はユダヤ啓蒙主義によって、近代科学に基づいてユダヤ教の哲学や歴史を研究するユダヤ学 (Wissenschaft des Judentums) が成立した。これは、ユダヤ人解放と共にキリスト教社会の影響を受ける中で、新たな枠組みでユダヤ教を捉え直し伝えていこうとする、ユダヤ社会内部から起こった運動である。ハインリヒ・グレーツはユダヤ学の歴史研究の草創期における代表的研究者である。
- (2) 断絶史観は 15 世紀ルネサンスの啓蒙的思想に注目し、この時代を近代の人間観・世界観を導く時代として、中世と断絶した時代と位置づけるのに対し、連続史観は 14 世紀以前から主に学問活動において起こっていた修辞学や古典学の再興への傾向に注目し、中世からルネサンスへの流れをくみ出そうとする。
- (3) Shlomo Simonsohn and Joseph Shatzmiller ed., *The Italia Judaica Jubilee Conference* (Leiden and Boston, Brill, 2013), pp.1-2.
- (4) <http://www.tau.ac.il/humanities/ggcenter/pitaly.html> (2014.10.24 閲覧)
- (5) 81 年に、“Project for the research, cataloguing, restoration and photographing of medieval Hebrew manuscript fragments found in the bindings of volumes in Italian Archives and Libraries”が発足した。2004 年時点でヨーロッパの他国で発見されている中世のユダヤ関連の資料は 1,700 部 (独 700, 奥 500, ハンガリー 170, 西 150) であるが、イ

- タリアで発見されたのは 8,000 部を超える。(Mauro Perani, “Italian Genizah” (http://www.morasha.it/zehut/mp06_italian_ghenizah.html) (2014.9.28 閲覧))
- (6) Pubblicazioni degli Archivi di Stato より, Saggi 2 (1981 の Italia Judaica のパンフレット), Saggi 6 (1984), Saggi 11 (1986), Saggi 26 (1989), Saggi 32 (1992), Saggi 47 (1995)。
 - (7) ドイツに比べてイタリアでは宗教改革が盛んではなく異教排除も深刻ではなく、さらにカトリック改革は 16 世紀よりもはるか以前から始まっていたという見解が歴史研究の中で出てきたことによる。
 - (8) この文化形成とは、ピーター・バーガーの演劇としての社会モデルに着想を得たものであり、世界の現実とは異なるファンタジーが想定され、その文脈の中で文化の各要素が役割を持った登場人物として配置されていく過程のことである。
 - (9) 「パラダイム」とはイアン・バーバーの用いる表現である。バーバーは科学に代表されるセオリーに基づくモデルが、新しいセオリーに置き換わるまで反証を組み入れることができないのに対し、宗教に代表されるパラダイムは、これに反する事柄をも解釈し含み入れるとする。ジークムントはバーバーとカルロ・ギンズブルグにヒントを得ており、キリスト教が 16 世紀に宗教改革をはじめとして他宗教と出会い普遍性に疑義が呈されたことで、「パラダイム」型から「セオリー」型に移りつつあったと考えていると思われる。
 - (10) Kim Knott, “Spatial Methods,” in *The Routledge Handbook of Research Methods in the Study of Religion*, ed. by M. Stausberg and S. Engler (London, Routledge, 2011).

参考文献

- Baron, Salo W. 1965. *A social and religious history of the Jews*, 2nd ed., V. 10, Chap. 46. New York and London: Columbia University Press.
- Baron, Salo W. 1969. *A social and religious history of the Jews*, 2nd ed., V. 13, Chap. 57. New York and London: Columbia University Press.
- Baron, Salo W. 1969. *A social and religious history of the Jews*, 2nd ed., V. 14, Chap. 60. New York and London: Columbia University Press.
- Bonfil, Robert. 1991. *Gli Ebrei in Italia nell'epoca del Rinascimento*, Florence: Sansoni. (*Jewish life in Renaissance Italy*, translated by Anthony Oldcorn. 1994. Berkeley: University of California Press).
- Graetz, Heinrich. 1894. *History of the Jews*, Vol. IV. Philadelphia: The Jewish Publication Society of America.
- Myers, David N., Massimo Ciavolella, Peter H. Reill and Geoffrey Symcox ed. 2008. *Acculturation and its discontents the Italian Jewish experience between exclusion and inclusion*. Toronto: University of Toronto Press in association with the UCLA Center for Seventeenth- and Eighteenth-Century Studies and the William Andrews Clark Memorial Library.
- Roth, Cecil. 1959. *The Jews in the Renaissance*. New York: Harper & Row Publishers.
- Ruderman, David B. ed. 1992. *Essential Papers on Jewish Culture in Renaissance and Baroque Italy*. New York: New York University Press.
- Shulvass, Moses A. 1955. *Haye ha-Yehudim be-Italyah bi-tekufat ha-Renesans*. New York: 'Ogen. (*The Jews in the Worlds of the Renaissance*, translated by Elvin L. Kose. 1973.

- Leiden: Brill).
- Siegmund, Stefanie. 2006. *The Medici State and the Ghetto of Florence*. California: Stanford University Press.
- Simonsohn, Shlomo. 1962. *Toldot ha-Yehudim be-dukasut Mantovah*. Yerushalayim: Makhon Ben-Tsevi 'al-yede Kiryat Sefer. (*History of the Jews in the Duchy of Mantua*, translated by Shlomo Simonsohn. 1977. Jerusalem: Kiryath Sepher).
- Simonsohn, Shlomo, and Daniel Carpi ed. 1993. *Shlomo Simonsohn jubilee volume: studies on the history of the Jews in the Middle Ages and Renaissance period*. Tel Aviv: Tel Aviv University, Faculty of Humanities, Chaim Rosenberg School of Jewish Studies.
- Simonsohn, Shlomo and Joseph Shatzmiller ed. 2013. *The Italia Judaica Jubilee Conference*. Leiden and Boston, Brill.
- Stow, Kenneth. 2001. *Theater of Acculturation: The Roman Ghetto in the 16th century*. Seattle and London: The University of Washington Press.